

ホームステイで心豊かなまちに

(田舎に泊めよう！)おかえりなさい。なつかしの国石見

いわみ芸術劇場館長

村川

修

今年で第三回目となるグラントワ合唱祭を十月十六日に開催しました。今回は栗山文昭氏がグラントワの芸術監督の就任後初めての合唱祭であり、石見地方のわらべうたによる新曲の初めての発表の場であるとともに、古事記が編纂されて一千三百年を記念し、古事記より「伊邪那岐・伊邪那美」「天の岩戸(新作初演)」を寺嶋陸也氏が作曲し、合唱曲として発表するなど、記念すべき合唱祭となりました。

この合唱祭には、栗山芸術監督が指揮する合唱団体「栗友会」から約八十名のメンバーが出演し、盛大な公演になりました。このメンバーには千葉大学と宇都宮大学から多くの学生が参加しており、これまでも何度か来益されていることから、益田に訪れることを楽しみにしておられます。その学生メンバーを

受け入れる「ホームステイ」をこの益田でできないだろうかという提案が栗山芸術監督からあり、公演直前であったため、今回は試行ということでグラントワ合唱団やボランティア会、グラントワ職員、まちづくり組織などへ直接お願いした結果八家族の協力を得ることができ、二十名の学生を受け入れることができました。内容は、一家庭につき二名以上の受入、グラントワへの送迎と食事、入浴、宿泊で学生から宿泊料金は

いただけないというものでした。合唱祭が終わって、受け入れ家庭に集まっていただけで報告会を行ったところ、各家庭でいろんなエピソードがありました。夕食の支度を一緒にした家庭、朝なかなか起きられなかった家庭、夜遅くまで尽きることなく語り合った家庭：たった一泊でしたが、いずれも「楽しい雰囲気だった」「また受け入れたい」「取組みを続けるべき」との意見をいただき、大成功となりました。

もちろん反省もあります。互いの住所すら交換しなかったため、それきりになってしまったなど、交流が続いていく仕掛けも必要です。

音楽活動の発展と地域文化の向上により、まちのイメージを高めたことへの思いからこの度のホームステイの取り組みを始めました。この地域の一般家庭に合唱団員がお世話になることで交流が始まり、その家族がホールに足を運び、まち全体が音楽に親しむ雰囲気が生まれます。このことにより、一人一人が特定の分野ばかりに関わるのではなく、違う分野の文化や芸術に関心をもち、文化芸術と普段親しみのない人にも劇場へ足を運んでいただくことに繋がっていくことを期待しています。

この取組を進める中で、まちづくりグループからは、ホームステイはできないが、環境保護活動への参



加や最近設立したサイクリングサークルでの受け入れは可能という声もいただきました。こうした活動も加われれば益田の町を深く知ってもらい、人的交流が広がり、益田への愛着がいつそう高まることになりそうです。また、学生の皆さんは普段大学で様々なことを学んでいます。大学生程度の年齢の若者が少ない益田の町にとって、子どもがいる家庭にホームステイすることができれば、彼らと子どもとの交流によって、互いに様々な将来の選択肢を考えるきっかけにもなるでしょう。

益田という小さなまちで都市部に劣らない文化芸術活動ができ、なおかつ他の分野とのつながりも大切にする文化性を育むことで、他に例を見ないまちが創られる可能性があります。

今回の実績を元に、益田を音楽の町とするための環境づくりとして、ホームステイの課題や提案を多くの方々からいただきながら今後も取り組んで参ります。引き続きご支援いただきますようよろしくお願いいたします。

※今回、グラントワでは文化事業課の佐々木真美と内野雅子が担当いたしました。

ここから見よう・スカイツリー

イベント・ボランティア・レディース・カルテット

十月二十二日のグラントワ開館 した。

六周年記念感謝祭きんさいデー、イベント・ボランティアグループは、自主制作の「澄川喜一センター長と東京スカイツリー」映像と東武（鉄道）グループ制作の東京スカイツリーDVDを上映いたしました。あの美しく天に届くがごとき東京スカイツリーのデザイン監修は澄川先生がされています。

「水質日本一、清流高津川の源地六日市から東京スカイツリーへ・・・」計画当初は、こんな大それた企画案をぶち上げ（笑）、勢いで東京スカイツリーへ取材に行くこととなりました。とはいももの、メンバーみな映像はド素人！さ

ていかがしたものか???

高津川&六日市（澄川先生の出身地：現吉賀町）取材はまたの機会にして、十月三日に東京でセンター長と共にスカイツリー取材をさせていただける運びとなり、イベント四人《昔》娘が上京することとなりま

した。

取材当日、お天気に恵まれ東京下町のさまざまな角度から眺めるスカイツリーは、場所ごとに色々な顔を見せてくれました。

とにかく高い！！ きれ

い！！ 開業した暁には、地上450メートルの特別展望台から見てみたい！とだれもが思うことでしょう。

最初は取材ということ緊張ぎみの私たちでしたが、現地スタッフともすぐに打ち解け、気がつくとおばさんパワー炸裂となっていました（爆笑）。

私たちのオススメは、吾妻橋のアサヒビルタワー22階の展望喫茶ルーム、コーヒー四百円で下町界限を一望でき眺めは抜群です。

たくさんビデオカメラを回し、意気揚々と益田に戻るとすぐに編集作業。しかし機械オンチに編

集ができる訳もなく、頼りになるグラントワ職員 島田仁志さん。お忙しい中 また使える映像があれだけ撮ったにもかかわらず少ない中、見やすくわかりやすく編集くださりありがとうございます。またマネージメント・田中雅恵様はじめ多くの方々にお世話になりました。本当にありがとうございます。本編集映像は、きんさいデーで上映いたしました。インタビュー等全編をみなさまにご披露できる機会があればいいなあと思っています。

東京スカイツリー同様、グラントワも注目し続けられる施設でありたいですね ♡♡



グラントワと私そしてボランテティア

フロント・スタッフ・ボランテティア

中島里美

グラントワが出来て今年六周年。

私はとにかくグラントワが大好き。建物、空間、美術館、大小の劇場。六年の間、私の心の癒しの場所である。特に日曜日の夕方など、散歩がてらなんとなく来てみたくなる。特別催し物がなくても、ベンチに座っているだけで心が落ち着きます。又、美術館に入ると美術館独り占め状態。なかなかこんなぜいたくなことはありませんよ。美術作品に映画、コンサート、講演など目と心の保養物質が一杯。そして二年前には美術展観覧中に下関の方と知り合いになり、それ以来ずっと便りの交換をしています。

グラントワは地産地消で石州瓦二十八万枚を使ってあり(高校の美術の教科書に載っていると)、大小の劇場と美術館の複合施設としては日本一。昨年は京都迎賓館と共に、第十二回公共建築賞の優秀賞を受賞。益田の地に居て世界・日本の

最高の芸術に触れ、鑑賞できたり。又、地元の人々の発表の場であったり、子供達にも一流の方々の指導を受けられる場所であつたりと、本当に誇りにそして自慢に出来るグラントワだと思います。

ボランテティアを始めたきっかけは、三年前のある日、事務室にチケットを買いに来た時のこと、事務室向いの講義室で十数人の方が何か作業をしておられました。職員の方に「何をされているのですか」と聞いてみると、「発送ボランテティアの人が、会員の方に毎月のお知らせパンフを送る作業をしておられるのですよ」と言われました。もう少し詳しく聞いてみると「基本月一回、多い時で二〜三回、来れる時間で、手伝える時間で、皆さん無理のないようにやっておられますよ」と。それなら私でも出来るかなと思ひ、早速にフロント・ボランテティアに

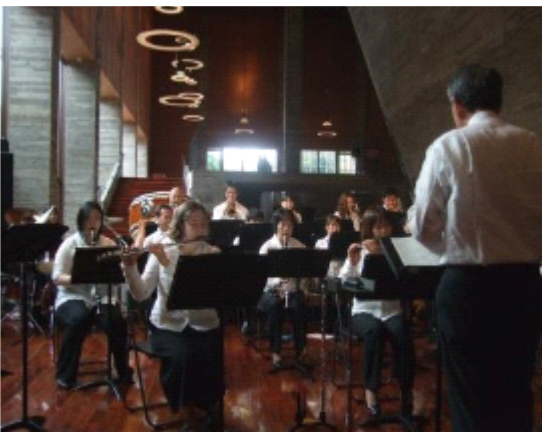


入りました。

ボランテティアには、「発送」「フロント」「生花」「イベント」「映画」「神楽衣装」など色々あります。グラントワにボランテティアがあることは知っていましたが、ボランテティアになる人は何かしらグラントワと関わりのある人では・・・と、一歩踏み出せずにいました。今は発送とフロントと神楽衣装のボランテティアをしてい

ます。

ボランテティアに入ってみると、年齢層も職業も色々な方々がいらつしやいます。職員の方、ボランテティアの方、そしてお客様、沢山の人の出会いがあります。人との出会いやつながりは、私の宝物です。無理せず、ご自身の出来る範囲で、皆さんもボランテティアを試みませんか。楽しいですよ。



歌劇「セビリアの理髪師」

二月十九日 午後二時開演

情報発信ボランティア 大庭 明 博

◎三つの「二度目」

イタリアの作曲家ロッシーニ（一七九二〜一八六八）の歌劇「セビリアの理髪師」（一八一六年初演）はグラントワ二度目の公演です。一度目はグラントワ開館記念での小澤征爾音楽塾公演で、あの「世界の小澤」が指揮棒を執りました。

また、今回は出雲市出身のテノール歌手錦織健氏のプロデュース作品で、二〇〇六年のモーツァルト歌劇「ドン・ジョヴァンニ」に次いで、こちらも二度目のグラントワ公演です。

そして錦織健氏のオペラ・プロデュースは今回が第五弾ですが、「セビリアの理髪師」は二〇〇四年以来の二度目（新演出）となります。

◎ ロッシーニ・クレツシエンド オペラ・ブツファ（喜劇オペラ）の作曲家としてのロッシーニの手腕は誰もが認めるところだったよ

うです。その技巧や軽妙な音楽における性格描写の的確さはモーツァルトに匹敵すると言われています。

それから「ロッシーニ・クレツシエンド」と呼ばれている彼独特の書法をご存知ですか。だんだん楽器群を増やしながら、早いリズム・短いフレーズを繰り返しつつオーケストラ全体が最強奏になるまでクレツシエンド（だんだん強く）を多用します。そのスピード感あふれる爽快な曲調は序曲を聴けばすぐにお分かりいただけます。

◎ あらすじ

公演チラシ裏面等にわかりやすくあらすじがありますので参照ください。一八世紀、スペイン・セビリアの町を舞台に、町の何でも屋、理髪師フィガロの活躍で町一番の美人ロジーナと貴族アルマヴィーヴァ伯爵が結ばれる幸福な物語です。

◎ 後日譚

「セビリアの理髪師」の原作はフランスの劇作家ボーマルシェの戯曲（一七七五年）でオペラの台本はステルビーニによるものですが、この話には実は続きがあります。ボーマルシェの原作にダ・ポンテが台本を書いた歌劇「フィガロの結婚」は一七八六年にモーツァルトが作曲しています。時は移りフィガロは伯爵付きの従僕となり、ロジーナはアルマヴィーヴァ伯爵夫人です。ところが伯爵は夫人に飽きて、その侍女でフィガロの許婚スザンナにご執心……。史上、最も完成度が高いオペラと言われている「フィガロの結婚」は「ドン・ジョヴァンニ」「魔笛」と並んでモーツァルトの三大オペラのひとつです。のでグラントワでの公演が待たれるところです。



【あ と が き】

十月二十二日（土）六周年記念のきんさいデーでは、石見美術館は、雪舟展が無料開放、ホワイエはコンサート会場、中庭は街中の雰囲気の出店等で大賑わいでした。

美術館での雪舟等伯筆の屏風絵は、さすがに緊張感の漂う作品でした。次回「日本のわざと美展」もご期待ください。